

もったいない 有り難い

北 島 典 生 (きたばたけ てんせい)

一.

ああ、弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。(『教行信証』総序、『註釈版聖典』132頁)

とは、まことに尊くも厳しいご催促であり、もったいない限りであります。そして、誠なるかな、摂取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ。

(『教行信証』総序、『註釈版聖典』132頁)

とは、本当に有難くも厳しいご化導であり、ひたすら申し訳なく、深く頭を垂れなければなりません。

二.

敗戦という未曾有の激変に遭遇した日本の社会は大混乱に陥り、道義はすたれ、秩序は乱れ、精神的支柱すら失われようとなりました。連合軍(主に米軍の将兵)の進駐、生活物資の欠乏、特に食糧難問題、政治・社会集団によるイデオロギーの対立・抗争などが、その混乱に拍車をかけたように思います。

軍国主義教育を受け、皇国青年であった当時の私は、龍谷大学予科一年生で、新生は原則的に全員入寮しなければならなかった樹徳寮から、市内の軍需工場に動員されていました。終戦の詔勅は、この工場でよく聞き取れないまま、緊張のうちに聞かされましたが、日本が全面無条件降伏して、戦争が終わったということは、放送終了直後に工場の幹部から告げられました。大きなショックを受けながらも、大学の指示に従って、夢中で帰省の途につき、八月二十日に家族の待つ自坊にやっと帰り着きました。

温かい家族に守られての平穏な日を過ごし、栄養失調症も回復の兆しが見られました。帰省中の友人ともよく会い、酒をのみながら議論をして、楽しい時を送りましたが、そのうちに「戦争に負けて急遽帰省したとはいえ、京都を発つ前に、なぜご本山にご挨拶に行かなかったのか。なぜお詣りせずに帰ってきたのか。ご開山さまに大変申し訳ないことをした。なぜ、なぜ」と自問自答を繰り返して悩み続けました。

いつごろ手続きがとられたのか、私はその事情を知りませんでした。札幌別院で数日間の習礼を受け、十月十六日に大谷光明猊下(本願寺第二十二代鏡如宗主のご実弟)から、受式者を代表して度牒を拝受する榮に浴しました。この感激は生涯を通じて忘れえない尊い思い出です。

三.

多感な青年の心は不安感に襲われ、焦燥感に駆られていました。その理由は、敗戦を契機として、それまでの価値観が一瞬に逆転したからです。国民の大半は失意のなかにありながらも、平和と自由の到来を諸手をあげて歓迎し、平和文化国家の再建を誓い、経済復興を期して、ひたすら民主主義社会の実現に向かって歩み始めました。こうした事態に異をとらえた人が、いないわけではありませんでした、

若者の目から見れば、それよりもむしろ大人たちの身振りの速さ、知識人の身のこなしの巧妙さに腹を立てたこともありました。「大人は無責任だ」と。

しかし、得度を一つの機縁として、外向性のみならず外攻性の強い自分の精神傾向に気がつき、もっと内向性に転じる方がよいのではないかと悩みました。このとき、得度習礼で教えられた仏教の「中道」を思い出し、内と外の両極に執われないこと、苦と楽に偏らない、進歩・保守の両極にも辺しないようにと、わずかながらも自覚できるようになりました。この中道の教えは、今日も大事にしているつもりです。

戦後の大混乱の最中に、四男の私が本派僧侶の仲間に加えていただいたことは、まことに不思議な仏縁と有難く、慶ばせていただいております。日本の復興と再建の歩みが、自由と平和の鐘のもとで開始されたその時に、わが第二の人生を歩み始めることができたからです。

#### 四.

混乱がやや収まりかけた一九四八（昭和二十三）年に、蓮如上人四百五十回御遠忌法要が本山で厳修されました。詳しいことは忘却の彼方にといいのですが、本山前の旅館はどこも参拝者でいっぱいという盛況ぶり、タンスの底に大事にしていたであろう和服を着た人たちが多く、そうした人たちの顔には、安堵感が漂い、希望に満ちた明るささえ見られました。このご法要を通じて、戦争中に遠のいていたであろうご本山を多くの僧侶・門徒が、再び身近に感じるようになったのではないのでしょうか。これは戦後の大法要の始まりでもありました。

その後十三年を経た一九六一（昭和三十六）年に、大谷本廟における予修法要を経て、親鸞聖人七百年大遠忌法要が盛大かつ意義深く厳修されました、当時の米ソ両陣営の冷戦構造は、一向に収まる気配はありませんでしたが、国内の戦後の混乱は沈静化し、経済もやや活性化の方向をたどり、宗門の社会的使命に係わる記念事業計画が立てられました。それらの事業は、いずれも緊急度と必要度の高いものでありました。

#### 五.

例えば、「聖典意識編纂」の企画は一九五六（昭和三十一）年五月に発足し、一九五八（昭和三十三）年四月には『浄土三部経』を出版し、続いて『教行信証』、そして『七祖聖教』上・中・下の三巻を順次出版し、一九六七（昭和四十二）年三月に意識事業は完了しましたが、その成果が熱望されていただけに高い評価を受けました。これは、二十年ほど前の蓮如上人御遠忌の記念として、『正信偈』や『十二礼』が意識（謹訳）された、その流れに沿ったものといえましょう。

また、その後の一九八二（昭和五十七）年には「真宗聖典編纂委員会」が発足し、『浄土真宗聖典』として「原典版」に続いて、一九八八（昭和六十三）年一月には、ご門主さまの「序」をいただいて「註釈版」が発行されました。これは時代の要請に応えた聖業であり、宗門史上特筆すべき快挙であります。これも教学・伝道重視のわが宗門における一連の記念事業と理解すべきでしょう。

#### 六.

次に、龍谷大学の単科から総合大学への拡充事業です。終戦直後の大学には、軍隊から帰ってきた学生が復学し、一時的には増えたものの、数年後にはみな卒業。一九四九（昭和二十四）年には、学校制度が改正され、大学は四年制に変更されました。それまでは、予科や専門部は三年制、その上の学部も三年制で、龍大には、六年分の学生が授業料を払っていたのですが、それが四年分に激減。更に龍大の場合は、連合軍の命により、戦時教育に協力したという咎で、十名ほどのいわゆる有名教授が追放された事件がありました。その先生等の空席を補うべく教授が数名招聘されました。追放された期間には多生の差はありましたが、数年の間には、それらの教授が全員復帰されました。このことは大学にと

っては人件費増という、思わぬ結果を招きました。

その当時は極度のインフレ時代で、寺院経済は疲弊<sup>ひへい</sup>していたため、寺院出身の多かった学生の授業料の値上げはとても無理、宗派も経済的に困窮<sup>こんきゆう</sup>していたために、龍大への助成金はぎりぎりとのこと、加えて教職員の待遇は最低限度いっぱいという状況でありました。

このような財政上崩壊寸前という危機的状态を龍大が克服することができたのは、偏<sup>ひとえ</sup>に宗派の大遠忌法要を期しての絶大な支援によるものであったといわねばなりません。

龍大の拡充案については、終戦直後から諸所において議論されていましたが、なかなか方向性すら打ち出すことができぬまま時が流れました。しかし、こうした財政危機を見逃すことなく、むしろこれを契機に世論を喚起して、拡充政策を決断され、その実現に陣頭指揮をとられた田丸道忍<sup>たまるどうにん</sup>理事長（総長）と増山顕珠<sup>ますやまけんじゆ</sup>学長に深甚<sup>じんじん</sup>の敬意と謝意を表さねばなりません。

新学部の開設は経済学部に始まり、時是一九六一（昭和三十六）年、親鸞聖人七百回大遠忌法要の記念すべき年でありました。その後三十年余の間に七学部一短大の総合大学に発展しました。これは、日本経済好況の時代と高学歴志向社会の影響によるところ大であり、大学にかかわった多くの人の尽力によるものでありましょう。現下の私大をとりまく環境は厳しいものがあります。

七.

宗門にとって教学面が重要であることは申すまでもありません。法人の社会的責任が、教学の振興・発展と、その社会化にあるわけですが、その実現のためには、財政が課題です。この財政には、あくまでも「入るを計って出すを考える」という総合的な堅実性・健全性が求められるとともに、馴染みうすいかもしれませんが、「費用対効果」という点検評価に基づく合理性を重視する必要があるのではないのでしょうか。

三年後にお迎えする親鸞聖人七百五十回大遠忌のご法要に私は、お預かりのご門徒の一人でも多くの人と共に参拝させていただき、阿弥陀如来のご本願を聞信し、慚愧<sup>もんしん</sup>と歓喜<sup>さんぎ</sup>のうちにご恩報謝のお念仏を称えさせていただきたいと切に希<sup>ねが</sup>うものであります。

（勸学）